

論文内容の要旨

The burden of caregivers present during deaths at home: Findings in a regional city of Japan and examination thereof
(在宅死を看取る介護者の負担感について：日本の地方都市における調査結果とその検討)

(小木田勇輝, 福本健太郎, 中村光, 大塚耕太郎)

(Journal of Iwate Medical Association 68 巻, 1 号 平成 28 年 4 月掲載)

I. 研究目的

厚生労働省の調査では、終末期を過ごす場所として国民の 63.3%が自宅を希望している一方で、66.2%がそれを実現困難と見なしている。理由の多くは介護してくれる家族に負担がかかるからというものであった。

これまで在宅死に際しての介護負担感を取り扱った研究は多く、さまざまな視点から報告がなされている。しかしながら、在宅終末期医療を受けた後、希望通り在宅死に至ることができた要因を介護負担感尺度を用いて検証した報告はほとんどない。

介護者の負担感を評価する尺度はこれまでいくつか開発されてきたが、その中で今日広く利用されている尺度として、Zarit による 22 項目からなる負担感質問票 (Zarit Burden Interview:ZBI) がある。本論ではこの ZBI 日本語版 (J-ZBI) を用い、在宅終末期医療を希望し、在宅死に至ることができなかった要因を検証することを試みた。

II. 研究対象ならびに方法

岩手県花巻市に在住で介護保険制度下での在宅医療制度を活用している被介護者およびその介護者について調査を行った。対象は平成 17 年 4 月から平成 24 年 12 月までの 7 年 8 カ月間、在宅終末期医療を希望し導入後に死亡した「終末期群」77 組、および平成 17 年 6 月の調査時点で非終末期であった「非終末期群」187 組の合計 264 組である。終末期群はさらに、最終的に在宅死となった「在宅死群」54 組、途中で介護困難となり在宅から医療機関に移行した「非在宅死群」23 組に区分した。

調査に用いたアンケートは自記式で、介護者および被介護者の性別や年齢、要介護度、かかりつけ医の有無などの項目の他、J-ZBI を用いて調査した。統計解析は SPSS ver. 20 を用い間隔・比率尺度には t 検定、名義尺度には Fisher の直接確立法を適用した。また、介護負担感に関連する要因を明らかにする目的で、J-ZBI 得点と上記各要因との Pearson 相関係数を算出した。有意水準 5%未満をもって有意とした。

Ⅲ. 研究結果

1. 対象者の基本属性と在宅介護状況

介護者は男性 38 名, 女性 226 名で平均年齢 63.3 ± 11.0 歳 (平均 \pm SD, 以下同様), 被介護者との関係は, 息子の配偶者 88 名 (33.3%), 娘 61 名 (23.1%), 配偶者 59 名 (22.3%) などであった. 平均介護期間は 4.3 ± 4.9 年であり, 77.3% がそれ以前に介護経験を有していなかった. 被介護者は平均年齢 83.0 ± 7.9 歳, 平均要介護度は 2.7 ± 1.4 度, 22.7% に認知症を認めた. 要介護度と J-ZBI 総得点に相関を認め ($r=0.23$; $p < 0.001$), 介護年数と J-ZBI 総得点にも相関を認めた ($r=0.24$; $p < 0.001$).

2. 非終末期群と終末期群における介護者および被介護者の基本属性と介護負担感

終末期群が非終末期群に比して要介護度が有意に高かった. 一方で介護期間は非終末期群が有意に長かった. また, 本調査では終末期群の方が, 認知症を有する割合が有意に高かった. J-ZBI 総得点は非終末期群で 32.5 ± 18.9 , 終末期群で 32.1 ± 18.6 と有意差は認めなかった. また, J-ZBI 下位尺度の Personal strain および Role strain の合計得点でも有意差は認めなかった.

3. 在宅死群と非在宅死群における介護者および被介護者の介護負担感

唯一, 非在宅死群において認知症を有する割合が有意に高かった. J-ZBI 総得点は在宅死群で 23.0 ± 11.4 , 非在宅死群で 53.6 ± 14.2 と後者で有意に高かった. また Personal strain, Role strain 得点はいずれも総得点と同様に非在宅死群で有意に高かった. 質問毎に比較した結果, 質問 8 および 14 以外はいずれの項目でも非在宅死群で有意に高かった. とりわけ, 質問 7 (将来への不安), 質問 15 (経済的不安) では 2 ポイント以上の差を認めた.

Ⅳ. 結 語

高齢者在宅医療における介護者の介護負担感について, 被介護者の状態像・転帰別に評価尺度 J-ZBI を用いて検討した. J-ZBI 得点に関しては, 介護度と介護期間双方との間に相関を認めた. 終末期群と非終末期群との間には, 介護負担感に差を認めなかった. 理由としては, 非終末期から終末期への連続性や, 非終末期群で介護期間が長く, 一方で終末期群で要介護度が高いというふうに両者間での基本属性同士の相殺が想定された. 在宅死を完遂した介護者に比して非在宅死を選択した介護者の介護負担感が強いことが示され, その主たる要因として将来への不安や経済的不安の存在が示唆された.

論文審査結果の要旨

論文審査担当者

主査 教授 酒井明夫（神経精神科学講座）

副査 教授 坂田清美（衛生学公衆衛生学講座）

副査 教授 木村祐輔（緩和医療学科）

論文審査結果の要旨

本研究は、地方都市在住で終末期医療を希望した被介護者および介護者を対象とし、在宅死の選択に際して大きな問題となる介護者の負担感について詳細な検討を試みたものである。Zarit 介護負担尺度日本語版(J-ZBI)を用い、終末期群と非終末期群との比較検討のみならず、終末期群をさらに最終的に在宅死となった群、途中で介護困難となり在宅から医療機関に移行した非在宅死群に分類し、在宅死に至ることができなかった要因を介護負担感の視点から検証している。その結果、終末期群と非終末期群では介護負担感に差異を認めなかった一方で、在宅死群と非在宅死群では、J-ZBI 総得点および下位尺度得点いずれも非在宅死群が高値であったことを明らかにした。また、非在宅死が選択される要因として将来への不安や経済的不安が存在する可能性を提示している。本論文は、日本の一小都市で行われてはいるものの、わが国における一般的な終末期医療の介護負担感、およびその要因を明らかにしており学位に値すると考えられる。

試験・試問の結果の要旨

日本における終末期医療の現状、介護負担感に関する心理的問題などについて質問し、適切な回答を得た。英語の試験にも合格した。学位の授与にふさわしい適正かつ十分な能力を備えていると判断した。

参考論文

- 1) 精神分裂病に対するインプロメン®の臨床使用経験（水野悦邦，他 14 名と共著）。
医学と薬学 19 巻，2 号 1988 年 2 月掲載
- 2) 生活史と密接な関連を有した憑依体験の 1 例（中村正彦，他 7 名と共著）。
岩手医学雑誌 45 巻，4 号 1993 年 10 月掲載
- 3) うつ病・抑うつ状態に対する塩酸トラゾドンの臨床効果（三田俊夫，他 19 名と共著）。
新薬と臨床 44 巻，7 号 1995 年 7 月掲載
- 4) 慢性精神分裂病に対する Bromperidol(インプロメン®)，Clocapramine（クロフェクトン®）併用療法による検討（阿部佐倉，他 11 名と共著）。
診療と新薬 31 巻，10 号 1994 年 10 月掲載